

おわりに

2010年のある日のこと。翻訳課資料保存室で資料整理をしていた時、何気なく手にした書物の一文が目にとまった。

おふでさきが教会本部から昭和3年に出版されるまでに、教祖が現身をかくされてから42年間の年月を要している。そして今我々はその時から数えて再び42年目を迎えるようとしている。(中略) 仏教やキリスト教の歴史をみても、民族の枠を超えて広がった世界宗教は、例外なくその聖典の翻訳事業を重視してきた。このことは玄奘三蔵の訳経や、キングジェイムズ聖書翻訳にみられる国家的レベルの協力体制をみても明らかである。

ところが一方、世界宗教を標榜する本教の場合はどうか。その翻訳体制はまことになさけないの一語につきる。しかし、こういうことは、ここで述べても始まらない。せめて我々の後に続く後輩の一翻訳者が、さらに42年後の2010年のある日、どこかで、この一文に触れ、いろんな意味で深い感慨にひたってもらいたいが為にここに書き留めておいたまです。後に続くものに、よくもここまでたどりついたものだという喜びの感慨にひたってもらうためにも、我々は今、地味な努力の積み重ねをしている。

これは、1969年に天理教教義翻訳研究会から発行された『翻訳』第四号の「二代真柱様と翻訳」という井上昭夫代表の論考である。この一文を読んだ瞬間、全身が硬直したのを今でもはっきりと覚えている。先人が記した予言を、偶然にも自身が目にし、恐ろしいほどの緊張感を覚えた。と同時に、しばしの間、「いろんな意味で深い感慨」にひたった。この出来事がきっかけとなり、その後、教義翻訳に関する古い文献や資料を精力的に調べようになった。それ以前は、日本語から当該言語への同時代的な変換という、翻訳の共時的側面を重視していたが、上述の出来事を経て、過去から現在、そして未来という、翻訳の通時的な側面を非常に強く意識するようになった。先人の地道な努力に対する尊敬と感謝の念、そして確固たる連帯感が、自身の翻訳にそのような変化をもたらした。

本連載では、翻訳という文書伝道によって、教えがどのように受容され、どのように変容するのかを考察し、伝道における翻訳の意義を確認しようと試みた。

「翻訳とは」(①～⑥)では、言語学における翻訳の位置付けを確認するために、まずムーナンの翻訳論を紹介し、翻訳を「言語内翻訳」、「言語間翻訳」、「記号法間翻訳」に分類したヤーコブソンの理論を基盤に、翻訳における様々な制約や限界を紹介しつつ、ヴァンドルシュカが指摘した翻訳の可能性について論及した。またソシュールが指摘した「言語記号の恣意性」に注目しつつ、ベンヤミンの「純粹言語」という概念からみた原作と翻訳の関係性を概観した。そして翻訳と解釈の関係性をガダマーの解釈学的視点から捉え、翻訳者が生み出す訳語とその語義獲得の過程を、ヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」をもとに確認した。

「宗教言語の翻訳」(①～④)では、キリスト教における言語の起源に関する教理として「バベルの塔」の説話を紹介し、「聖なる言葉」と他の諸言語との緊張関係を教理的にどのように解釈するのかという視点がいかに重要であるかを指摘しつつ、宗教言語の翻訳と教学・神学の相互補完的な関係性に注目した。さらにソスキースやマクファグューの指摘をもとに、宗教言語

におけるメタファーの有効性と翻訳における問題点を論じた。

「初期仏教にみる「ことば」の諸相」(①～⑥)では、中国における仏教の受容と変容の実態を訳経史から紐解くために、まずその前提として、釈迦の「ことば」を軸にインド仏教の起源と展開を概観し、インド世界において釈迦の「ことば」を取り巻く状況がどう変化し、釈迦の「ことば」がどのように受容されていったのかを確認した。

「仏典翻訳の歴史とその変遷」(①～⑥)では、訳経史における「疑経」や「格義」など、漢訳特有の事象を確認しつつ、いくつかの事例を通して、道安、鳩摩羅什、玄奘の翻訳論を比較検討し、改訳の過程で教理の受容と変容がどのように起ったのかを分析した。

最後に「天理教教義翻訳の諸相」(①～⑥)では、教義翻訳史を明治期、大正期、昭和期(戦前、戦後)に区分し、これまでの歩みを概観した。その中で教義翻訳に深く関わった人物とその功績に触れ、伝道における翻訳の意義を確認した。

宗教言語の翻訳、とりわけ原典の翻訳者は、原典の読み手であると同時に、翻訳書を読む教信者に、宗教的感覚と共に原典の「ことば」を共時的かつ通時的に届けようとする書き手でもある。数多の訳経僧も釈迦の「ことば」に没入しつつ、約千年にわたって多くの仏典を漢訳した。天理教の教義翻訳では、翻訳者は教祖の「ことば」を解釈する存在であると同時に、それを伝え、書き記す存在でもある。いかに伝えるかということに思案する時、翻訳者は必然的に教祖のまなざしを意識せずにはいられない。原典の言葉との関わりあいは、翻訳者が「ことば」を記号としてではなく、教えの神髄として捉え、信仰者としての実存的な関わり方の次元において、自己を措定する営みであるともいえよう。

言語とは我々の存在を支える大地のような存在である。その言語という「大地」に「教え」という種をまくのが教義翻訳である。種としての「教え」は普遍的で変わることはない。しかし、言語は多様でそれぞれの土地、時代により変化する。同じようにまいた種も芽が出る場合があれば、なかなか芽が出ない場合もある。それでも、先人たちが積み重ねてきたように、翻訳によって「教え」という種を地道にまき続ける事で、いつの日か芽が出て花が咲くように、それぞれの言語圏で教えが浸透し、その実りとして「教え」が受容され人々を支える言葉となる。その日が来るまで翻訳によって「教え」という種をまき続けることが、翻訳という文書伝道を担う「道具衆」の使命であろう。約千年にわたる訳経史に比べると、天理教教義翻訳の歴史はまだ浅い。しかし、その歴史の糸は未来へ向けて今も着実に紡がれている。

これまでの連載では、粗雑な駄文の行間に反論、議論の余地が十分にあったように思うが、問題提起という点では、かえってその余地により責を果たすことができたのではないかと考えたい。

天理大学おやさど研究所の先生方には、校正編集に多大なるお力添えを頂いた。衷心より感謝申し上げる次第である。また、天理教海外部の松田理治部長には、御用繁多の中、快く校閲の任を引き受けて下さり、多くの御助言と御指導を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げたい。先学の御指南と御批判を請うとともに、後学の活躍を祈念しつつ、茲に擱筆する。